

流星を見たり、甲板に跳ね上がった飛魚を丸かじりしたりの楽がありました。海軍の戦いは半日か一日で勝敗の結論が出てしまうので、陸軍と違うから一般人には海戦の見当がつかぬでしょう。

私は駆逐艦に救助され、沖繩の中城湾へ上陸し、戦艦に便乗して呉軍港に帰りました。戦隊は松山航空隊の基地に帰りました。私の本隊の籍は横須賀航空隊にありましたが、航空本部の命令で働いていました。そのため「彗星」の製造会社、名古屋の愛知航空へ転じ、航空機各三千機増産の監督官となる命令をもらいました。連日の軍需工場空襲に奮闘中、同僚の死もあり、時折「軍民離間」なる言葉を耳にし、戦争の恐ろしさを知らずの私は、身の毛もよだつ思いもしました。その後は、平和であれば仲良しであればと思えました。私の海軍生活七年間は、秒速以上の速さで、人間の一生の物語を振り返る暇ありませんが、私には艦では奇跡が随分ありました。一カ月間の残務整理を終え復員しました。ただ残った宝物は、無形の「五分前精神」と、平和とそして十指に余る「あだ名」の勳章だ

けであります。身に染み込んだ「争う愚かさ」知らぬことは、何と嘆かわしく、永遠の平和は望めないか、「平和を望む死に損ない奴」であります。今は娘四人、孫八人の平和な暮らしです。

## 不沈駆逐艦「楨」と私の人生航路

石川県 松井喜一

いま、私は生を受けて七十余年、過ぎ去った時の流れをしみじみと想い浮かべております。

三歳の時に父が亡くなり、母と祖母に育てられた、今と言う母子家庭であります。そのため子供時代は、経済的にも支柱である父なき生活でありましたので、小学校を終えたら奉公に出なければなりません。私は向学心に燃えていたのですがそれも叶えられないので、中学講義録で猛烈に勉強して何とか学資のいない学校へと思い、海軍兵学校を志願しました。

しかし、母は「お前は長男だから兵隊にだけは行っ

てくれるな」と泣いて諫められ、母に育てられた私は海軍兵学校志願を断念したのですが、時代はそれを許さなかったのか、徴兵検査の結果、現役で海兵団へ入団することになりました。

海軍で三カ年、娑婆に帰って五十年、好きだった海軍、そして乗り組んだ駆逐艦「楨」、その「楨」の想い出と、私の五十年に及ぶ人生航路が常々だぶって、いまは懐かしい想い出にふけています。

生まれたばかりの「楨」、建造を終わった「楨」に艦装員きせうぐんとして乗り組んだのは昭和十九年七月で、八月には完成して回航、水雷戦隊として「月月火水木金金（十日曜休日なし）」の猛訓練、そして十月「捷号作戦」による比島沖海戦に出撃、戦いは我に利あらず、しかし、沈むことなく帰還しました。

そのことにダブらせて、昭和二十一年三月、「楨」より下りてから私の人生が始まりました。娑婆に帰っても生きる目的も定まらず、しばらくはブローカーという闇商人となり生活を支えなければなりませんでした。

翌年夏、映画館の前にあった僅か四坪（十二平方メートル）の土地を手に入れ葺簀かじ張りのガーデンを造り、一杯五円のかき氷を一日二百杯ぐらいつつ売りました。その年は幸いにも空梅雨で休み無しに稼ぐことができました。夏が過ぎて、ガーデンに杉皮の屋根を葺き、バラック店舗を造り、食品店の開業に漕ぎつけました。

それから三年後には、本建築の店舗として営業、昭和三十五年に夢が叶い、四坪の店舗から中心商店街で五十坪の店舗に進出することができました。これまで私の愛称である「松ちゃん」を店名といたしておりましたから、この時「松任フードセンター」と店名を改め、食品・日用雑貨の販売をする総合食品店を創業したのであります。

世は池田内閣の「所得倍増」を謳歌している時代でありました。そのためか、進出して五年後には店舗を新築して、一階を食品部、二階を喫茶・レストランとして新しい出発をしました。しかし、間もなく本格的なスーパーマーケットが金沢から進出して来て、激しい商戦を繰り返すこととなり、遂に、資本力の無い私

は敗戦を覚悟しなければならなくなりました。

駆逐艦「楨」が比島沖の海戦で敗れたと同じく、いかに頑張っても物資力豊かな米軍には勝てなかったと同じでありました。「楨」は戦いに敗れたが沈みませんでした。早速損傷を修復して、航空母艦「隼鷹」の護衛任務に出動し、無事任務を終えて内地帰還の寸前に雷撃（魚雷攻撃）を受けましたが、それでも沈没は免れました。

商戦に敗れた私は、次の転職を如何にすべきかと悩んでいましたが、総合食品店から撤退することを決意しました。当時のリストラの断行であります。十五人の従業員を三分の一に減らして、一階を大衆食堂に轉身、二階は喫茶部だけにしました。

やがて、商店街が近代化を図り、道路の拡張に合わせて各店舗も近代的に改装され、中心商店の面目は一新されました。私は商店街の役員であり、町内会長もしていたので近代化の推進役でもありました。

「楨」は修復に三カ月もかかり、心機一転して内海

に回航しました。そして戦艦「大和」と共に「菊水特攻隊（水上特攻）」として沖繩に突撃することになりました。当時、軍人精神旺盛な私は「今度こそ立派にご奉公ができ、男児の本懐である」と、喜び勇んでいたのですが、しかし、途中で転進、本土決戦に備えることとなり、私は残念でたまりませんでした。今にして思えば、水上特攻に行けば、南海の藻屑となり、今の私は無かったでしょうが。そして、八月十五日終戦となりました。

私は、商店街近代化に併せ店舗を全面改装しました。その時の私は「大和」出撃の心境で経営内容も近代的に、大衆食堂を止め、一階を喫茶、レストランに、夜間はスナック、二階に貸卓麻雀荘を経営、レジャー産業に轉身、店名を「レストラン・喫茶楨」と改名しました。

忘れられない「楨」を、度々危険に遭遇しながらも沈まなかった不沈駆逐艦「楨」の運命にあやかりたい思いから、三十五年間頑張った商売も、息子と職業が違い、後継ぎが無く、店はテナントに貸して廃業する

ことになりました。これが私の「終戦」であります。

私は「海軍通信学校」で学科、術科と共に精神力等で揉まれましたので、この私の海軍魂を中心としたものを企業として發揮することになったのは、私が六十歳の時でありました。電子部品工場を創業して、厳しい海軍練習生時代を想い起こして頑張っていました。が、だんだんと歳には勝てず、古希を迎えて現役を退きました。「レストラン・喫茶慎」の航路（現役）は二年間、そのうち一年八カ月を共に過ごしました。

調べるところによりますと、その駆逐艦「楨」には初代がありました。初代は大正七年八月十日生れ、即ち就航の初めでありますから、第一次世界大戦の終期であり、九年八月二十九日より露領沿岸警備とあります。即ち、シベリア出兵時から、北方、私が生まれた頃の発着地は室蘭、大湊でありました。以来、中国、黄海等の外国鎮戍が満州事変勃発前まで続いています、昭和九年四月一日除籍となっています。私の小学校時代であります。

私との直接のつながりは二代「楨」からであります

が、その「楨」も比島沖海戦を経て終戦。十月除籍後第二の勤めをして、特設輸送船として復員業務、本当の意味の終戦処理。外地の軍人、軍属等の輸送、復員業務に従事したのであり、最終は賠償艦として英国に引き渡され、その後、その生命を終えたと申します。

私は「楨」を降りて五十年、過ぎた月日は「あっ」という間でありました。不沈艦「楨」と私の人生航路をダブらせて、いついつまでもなつかしい「楨」を忘れることのできない私なのであります。

今は、余命を昔の奉仕の信念でボランティアとして、かつて共に国家のために奉仕して、一命を長らえ生き残った戦友、所謂、恩給欠格者の悩みを感じて、恩欠連石川県連合会の事務局長として奉仕しています。

### 【解説】 駆逐艦「楨」について

松井氏乗組みの「二代楨」は、正式には昭和十九年八月十日竣工で、昭和十九年八月より十二月までは、発着地は瀬戸内海の呉が主であります。加算は戦務甲でありますから、常に戦闘に参加ということで、そ

の間は呉を母港として比島沖戦等で奮戦したわけでありませぬ。

駆逐艦「楨」は、戦時急造型、いわゆる「松型」駆逐艦で艦名には木偏が付いた樹木名が付けられております。「松型」は「丁型」で計四十一隻建造予定でしたが、そのうち九隻は未完成のまま終戦を迎えていると、資料にあります。

二代目「楨」は、昭和十九年二月十九日起工、六月十日進水、八月十日竣工し一等駆逐艦に類別され、昭和十九年より二十年の間、第二次大戦において比島沖海戦、輸送、海上護衛作戦に参加。昭和十九年一月九日、長崎県女島灯台附近で米潜水艦の雷撃を受けて損傷、終戦時呉に所在、二十年十月五日除籍、二十年十二月一日特別輸送艦に指定、二十二年八月十四日賠償艦としてシンガポールで英国に引き渡し後、解体とあります。

この時に「楨」は艦ではなく、部品、鉄材に化してしまっただけでありませぬ。なお、「楨」の建造は舞鶴工廠であります。

「松型」駆逐艦の諸元は次の通りであります。

排水量―一二六二トン。長さ―九一・一五メートル。幅―九・三五メートル。平均吃水―三・三七メートル。

機関出力―一九〇〇馬力。速力―二七・八ノット。

燃料搭載量 油―三七〇トン、乗員―二二人。

備砲―一二・七センチ砲三門。

二・五ミリ機関銃―三連装四、一連装八。

魚雷発射管―九二式四門。魚雷―九三式四。